



いづみ

No.66

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 36



《呼ぶ声》

秋山 知子

(2 ページに「作者の言葉」)

緊張感を楽しむ遊びであったり、祈りの儀式だったりする、石を積むという行為があります。

この作品は、いろいろな形、いろいろな大きさの石を選び、バランスを取りながら積み上げ、束の間の楼閣を作ってみるというイメージを保ちながら製作しました。2015年の個展で展示した際の写真です。（秋山知子 道展会員 札幌在住）

タイトル：《呼ぶ声》

制作年：2015年

素材：FRP

サイズ：H56×W18×D20cm

設置場所：作者所蔵

彫刻家、本田明二生誕100年を祝して

学芸員 山田のぞみ

当館にゆかりの深い彫刻家、本田明二の展覧会を2018年11月2日から、2019年1月17日にかけて開催中です。「ひとノミひとノミ、私は木を削る。」という副題は、本田が自作について語った言葉のなかから選ばれました。本展は本田明二が特に数多く制作した木彫を中心に構成されています。その作品には、木のもつ素朴な風合いと、丹念に形づくられた美しさが共存しています。

生前の本田を知る方々からは、この副題にあるような「慎重」で「計画的」で「実直そう」な部分よりも、おおらかで時に豪放磊落^{らいらく}な一面を示すさまざまなエピソードをお聞きすることがありました。会員の皆さまには、本田明二の活躍がご記憶におありの方も多くいらっしゃるかと存じます。本展でご紹介している作品からは、本田のどのような面が思い起こされるでしょうか。

2019年は本田明二の生誕100年、没後30年にあたります。本田は、札幌彫刻美術館や札幌芸術の森の設立と運営に尽力し、自らの彫刻制作に打ち込むだけでなく、この街に文化芸術が根付くことを強く願った人物でもありました。本展の準備を通して、作品に加えてそうした熱い思いに触れることができたのは、大きな糧となったように思います。



意識をひらく

唐牛 幸史 (彫刻家)

昨年の年頭、メキシコに住む同窓の友人、奥村裕之君のアトリエの片隅を借りて石を彫っていました。それは、メキシコ人類学博物館で開かれた佐藤宗太郎という御歳 83 歳の写真家の展覧会の中に実際の石の彫刻を展示するためで、この機会に全て手彫りで、改めてじっくりと石に向かってみようと考えてのことでした。

僅か 45cm 角の小さな石塊でしたが、はじめから大きな手応えを感じました。それは、石自身が、かたちを求めて盛んに動きまわるような感覚で、石には石の意志があるかのように思えるものでした。制作しているのは石自身で、「私」は手を添えて、手助けをしているに過ぎないのです。

硬く重い石を扱うのですから、からだは疲れるのですが、やがて時間の感覚が、意識から抜け落ちて、石に添うようからだを動かしてかたちに向かうようになっていきます。

思うと、彫刻という仕事では、どの素材を扱うにせよ、いつもそういった感じがあり、石や土、木といった素朴な素材であればあるほど、その傾向は顕著であるように思えます。

そして、「自分」という意識が最小になり、素直になってゆくと、「共感」が開いてきます。石は、人と世界を繋ぐメディアであって、自分の中の「我」に自由気ままな好き勝手放題をさせるためにあるのではないのです。

一方、本当の「自由」が開いて、「遊び」へと導いてくれます。「楽しみ」がひらいてゆくのです。こんなとき、どうしても、彫刻の本質は、宇宙との共振にあることを思わざるを得なくなります。それは、果てしのない未知へ向き合うということでもあります。

奥村君のアトリエは、「ランチョ・ビエホ」という最下層のインディヘナの村に隣接していますが、具体的にはここの方たちや博物館の展示で働く人足の皆さんたちが、親指を立てて共感の意を示してくれたこと、展覧会報道のメインビジュアルとなったことを今回の糧として受け取ることとなりました。確かに共感が広がって、世界と共振し出しているのです。この手応えをより確実なものとして感じたい。だから、もっともっと意識を開こう。拓いてゆこう。今は、ただただ、強くそう思うばかりです。

寄稿

マリアノ・フォルチュニ・マドラゾ (Mariano Fortuny Madrazo)

～舞台照明の革命、モダン・ウーマンに斬新な衣服～

ブルース ダーリング Ph. D. (美術史家)

本郷新記念札幌彫刻美術館で2018年10月6日に行われた筆者の講演会「華麗なる衣装、光の不思議な力」に関連して寄稿をお願いした。

マリアノ・フォルチュニ (1871-1949) は、グラナダに生まれ、1875年からパリで育ち、18歳から魔法のような「水の都」ヴェネツィアに住み着いた。フォルチュニは画家、写真家、舞台デザイナー、照明器具発明家として多彩な才能を発揮したが、ここでは舞台照明とテキスタイル・衣服のデザインに注目したい。

フォルチュニは、照明がガス灯から電灯へ移行する20世紀初頭という時代にあって、総合的舞台芸術への電気の可能性を求め、理論としてではなく、舞台(ドラマ)の効果に実際に使った最初の人である。彼の光への関心は光量ではなく光の質にあった。フォルチュニの言葉を借りれば、彼の舞台照明の改革は次の3つの部分で構成される。

①反射を使った照明システム (間接照明の導入)

②反射による舞台装飾システム、空と遠景を演出するための凹面ドームの使用

③舞台の視覚要素を完全に改革すること

最も重要なのは③で、その理由をフォルチュニは、「私はこれまで舞台の背景を<空間>の中だけでしか作ってこなかったが、舞台背景とは音楽の領域内で、換言すれば<時間>の中で調整されるべきものである」と述べる。

ワーグナーの提唱する総合芸術をめざし、舞台背景画や照明に携わったことが、フォルチュニの有名なテキスタイル・衣服のデザインに繋がっていく。

1907年、彼は妻のアンリエット・ニグリンとともにヴェネツィアのオルフェイ宮殿 (現フォルチ

ュニ美術館) にテキスタイル・衣服工房を設立した。この工房から生まれたベストセラーは、当時、地中海のクレタ島で新発掘された遺跡「クノッソス」に因んで名づけられたスカーフと、ギリシアのデルフォイで発見された「デルフォイの戦車御者像」から命名された「デルフォス」ガウン(日本でいうワンピースのロングドレス)であった。軽く風のようにゆれる長いスカーフはモダンダンサーたちを魅了し、ダンスの革命に一役かった。「デルフォス」ガウンはシルクサテンの布に繊細なプリーツ加工を施したもので、ギリシア彫刻や陶器画に見る少女たちが着るキトン・ドレスの再創造だ。「デルフォス」ガウンはヴェネツィアの運河の輝きを映すように自然染料で染め上げられ、そこにアクセントとしてムラノ島のガラス工房で制作された小さなビーズを脇に並べている。

フォルチュニは絹製ベルベットのコートも制作している。このベルベットにはルネッサンス絵画をはじめ、古代の中近東や北アフリカにおよぶ文化圏からヒントを得たモチーフを金・銀・多色により捺染プリントをほどこしている。こうして、フォルチュニは古代の伝統的な形やモチーフを発想源として蘇らせ、最も斬新的にして魅力的な衣服を創り出した。染料の処方箋、プリントの技術、プリーツの加工方法は謎のままである。フォルチュニの衣服デザインは時代を越えて新鮮で、今も人気がある。

ひとりごと

彫刻家・浅井憲一

幼いころ、街中にある彫刻は一般的に銅像と呼ばれていたと思います。その中で特に僕の印象に残っているのは本郷新の《泉の像》、そして、何とモダンで美しいのだろうと思った山内壮夫の《希望》でした。

私事ですが、鉄材を使って彫刻を志して40年くらいになります。その頃は、彫塑で人体を制作した作品が主流で、鉄を使う方はまだまだ少ない時代でした。粘土で人体を制作し石膏で型を取り、その型にまた石膏を流し込み、外側の型を割って原型を取り出す手法です。

この工程が何ともマドロッコシク思われました。19歳の時に上京し、5年程小さな美術研究所で絵画のいろはを習いながら、三畳一間の部屋に帰り、モデルも居ないので自画像ばかり描く毎日で、段々生の自分と向き合う事に辛さを覚えるようになっていました。

そんな時、友人に誘われて行った作品展が、鉄を溶接して人体を制作している作家の物でした。鉄材を触った事も無いのですが、あ・・・これだと思い、ホームセンターで溶接機を入手し、30cm程の立像完成。そう云えば上京して直ぐに行った上野の西洋美術館で初めて観た、ロダン作《考える人》。その圧倒するような力強い体を小さく歪め、心の不安感を表現した作品に心を掴まれた事を覚えています。これが僕の根

っこに今でも残っているのだと思います。

時は高度成長で、僕は半年アルバイトをして後の半年で制作し公募展に出品する毎日を数年送っていました。当時札幌では駅裏八番倉庫をはじめアングラ演劇・舞踏等盛んに上演され随分刺激を受けました。暫くして僕も東急イン・プラザ 109（現東急REI ホテル）で初の個展を皮切りに毎年続けていました。世の中はバブル期を迎え近代的な高層ビルが急速に街中に建ち始め、それと同時にパブリック空間にはモニュメントがあちこち設置されました。そのスピードは凄まじく、眺めていた側の僕にも仕事の依頼が来るようになりました。

現代美術も同時期に起こり、ファインアート、コンセプチュアルアートなどなど、アートは急速に人々の中に広がったように思います。

以前に美術（アート）は社会の中でどんな役割があるのだろうなどと考えた事があります。僕が思ったのは作家の数だけ違う作品（表現）があるという事実です。これは当たり前ですが、人は皆オリジナルであり、そしてそれが個性なのです。個性の違いを最も象徴するであろう美術の世界をそれぞれの個性でもっと楽しみましょう。

さてさて美術（アート）は、そして彫刻はこれから何処に向かうのでしょうか。

会報「いずみ」全号

国立新美術館が収蔵公開へ

友の会の会報「いずみ」の創刊号から最新号までが国立新美術館（東京・六本木）のアートライブラリーに収蔵保管され、今後の新刊も順次公開される。

これは昨年夏、友の会の活動を知った同美術館の坂口英伸アソシエイトフェローからの申し入れで実現した。

「いずみ」は2002年に創刊、年4回発行し、今号で66号を数える。創刊号を含む既刊号はすでに橋本会長が手元に保管しているものを送り済み。

同美術館は2007年の開館でコレクションを持たず、国内最大の展示スペースを生かした展覧会や美術に関する情報、資



（国立新美術館＝同館 web から）

料収集を手掛ける新しいタイプの美術館（六本木7-22-2 ☎03-5777-8600）。

このニュースは近刊の「V-net Hot News」でも取り上げら

れた。

2018年

彫刻清掃延べ12回

来年度への課題も

2018年の彫刻清掃活動は5月24日の地下鉄真駒内駅前周辺から始まり、10月11日、羊ヶ丘展望台での清掃で終了、延べ12回の清掃活動を行った。

最終回の羊ヶ丘展望台では直前の台風の影響で日程が変更になった修学旅行生らの団体が早朝から次々に到着、記念撮影の邪魔にならないよう＜クラーク像＞の清掃を止め、他の彫刻に変更するハプニングも。



このほか今年度の清掃活動では管理者である土木事務所の都合での中止、大通公園がイベント開催中で清掃不能になったケースも。

来年度はこれらの課題の対応策検討や彫刻設置団体への清掃活動への参加呼びかけなど問題点も浮かび上がった。

北海道史モニュメント彫刻100選

人物・記念碑などの候補選出へ

永山武四郎、岩村通俊、島義勇、高田屋嘉兵衛、依田勉三、エドウィン・ダン、ウイリアム・クラーク。

ご存知の北海道開拓史に欠かせない人名ばかり。これらの人物を含め、ざっと80人余りの人物名や記念碑がこのほど友の会の「北海道史関連モニュメント彫刻100選」の候補として挙がった。

100選は北海道が展開する「北海道みらい事業」に応募する形で友の会が所蔵する道内約3000点の彫刻作品の写真データから、開拓に貢献した人物や事績のモニュメントを選び出すもの。

昨年11月に有志会員が集まって第1次候補として冒頭の人名など、合わせて80点余りのリストを選び出した。人物以外ではモヨロ漁労者の像（網走）、殉職九人の乙女像（稚内）、勇払千人同心（苫小牧）、風雪の群像（旭川）、インディギルガ号遭難碑（室蘭）などが候補に上った。

今後、さらに検討を重ね、2019年度中には100選候補を絞り込む予定。多くの会員からの

意見を歓迎している。

市民活動サポートセンター機関誌

「みんなのしみサポ」の表紙に

友の会が登録団体となり、日ごろ活動の場にしている札幌エルプラザを運営している札幌市市民活動サポートセンターの機関誌「みんなのしみサポ」51号に友の会の活動が取り上げられた。



「しみサポ」51号（2018年10月発行、8頁）は「札幌を彩るアート」がテーマ。友の会のほかNPO法人北海道を発信する写真家ネットワーク、さっぽろアートエクスプローラーの3団体の活動ぶりが紹介された。

橋本会長ら取材時に居合わせたメンバーの写真が表紙を飾り、中面で友の会の彫刻清掃活動が紹介されている。

猪股岩生会員が出版

絵画作品集「北海道三十六景」

友の会会員で造形デザイナー・画家として活躍している猪股岩生さんがこのほど絵画作品集「北海道三十六景」第1巻を出版した＝写真＝。

猪股さんが札幌を拠点に公

園や景観に関わる仕事で全道を回る中、各地で出会った四季折々の風景や野生生物の美しさをスケッチ、作品に描き出した。



利尻島を望むサロベツ原野や支笏湖、エゾシカ、キタキツネなど北海道の風景と野生動物の姿が鮮やかなタッチで描かれている。

問い合わせは猪股さんまで（☎011-841-5206）。

北方ジャーナル12月号
橋本会長にインタビュー

道内誌「北方ジャーナル」が昨年12月号「ZOOMUP」欄で友の会の橋本信夫会長のインタビュー記事を4ページにわたって掲載した。



「メセナの意識乏しい北海道で『街なかの美』である野外彫刻の保全・維持運動を地道に展開」の見出しで、同誌の武智敦子さんが聞き手。

インタビューの中で橋本会長は北海道百年記念塔の解体

問題について「維持費用が掛かりすぎるという理由から消えようとしているのは日ごろのメンテナンスを怠ってきたことに尽きる」と指摘、モニュメントが作られた目的に沿った維持管理をすべきと力説している。さらに、道内の野外彫刻について「150年余りの歴史の中で多数の野外彫刻が設置されてきたが、作品に関する資料が行政機関を含めてどこにもない」とし、「設置時のテープカットセレモニーを最後に保存対策はほとんどとられていない」などと日ごろの持論を述べている。

「採炭救国坑夫像」修復

夕張市が住友財団の助成制度申請

夕張市の「石炭の歴史村」にある「採炭救国坑夫の像」の修復を巡り夕張市教委は新年度予算編成にあたり、公益財団法人住友財団の「文化財維持・修復事業助成申請制度」を利用する意向を友の会宛てに知らせてきた。

この像は1944年の制作で石炭産業の変遷を象徴する産業遺産としての保存が望まれている。

2019年彫刻友の会新年会

1月26日（土）11:00

奥井理ギャラリーで開催

事務局日誌▼9月13日＝定例役員会(エルプラザ)彫刻清掃▼同日＝<漁民の像>清掃(大通公園)▼26日＝医療雑誌「ケア」11月号彫刻編集会議(エルプラザ)▼10月11日＝定例役員会(エルプラザ)太陽財団助成金申請▼同日＝<丘の上のクラーク像>清掃(羊ヶ丘展望台)▼30日＝太陽財団助成金申請書提出▼11月5日＝国立新美術館から「いずみ」公開閲覧の連絡▼8日＝定例役員会(エルプラザ)彫刻100選検討ほか▼21日＝「ケア」解説原稿編集▼28日＝歴史彫刻100選選出会議(エルプラザ)

編集後記▼「北海道史モニュメント彫刻100選」で彫刻家・梁川剛一さんの名が浮かんだ。記憶にない方も大勢いるに違いないが、函館出身で、函館にある高田屋嘉兵衛像の作者と言えば思い出されるかも知れない▼梁川さん、彫刻家というよりも挿絵画家の方でも有名だった。往年の児童文学の伝記でこの人の手にかからなかった偉人はいない。東京・中野のアトリエでお会いした折の温厚な人柄が目につく。今年が没後33年にあたる。(大内)

札幌彫刻美術館友の会
会報「いずみ」 No.66
2019年1月1日発行
発行人 橋本 信夫
編集者 大内 和
(札幌市清田区清田5-4-6-30
011-884-6025)
印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」66号 目次

自作自選36 《呼ぶ声》	秋山知子	表紙
作者の言葉		2
宮の森の四季36「彫刻家本田明二生誕100年を祝して」山田のぞみ		2
風見鶏「意識をひらく」	唐牛幸史	3
寄稿「マリアノ・フォルチュニ・マダラゾ」	B・ダーリング	4
寄稿「ひとりごと」	浅井憲一	5
友の会ニュース		6-7
「いずみ」国立新美術館で公開/2018年清掃延べ12回/彫刻100選選考/「しみサボ」表紙に/猪股さん作品集/橋本会長インタビュー/採炭救国坑夫像助成申請/友の会新年会		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■本田明二展

ひとノミひとノミ、私は木を削る。

開催中—2019年1月17日(木)まで

■コレクション展 彫刻家・本郷新の見た「異国」

1月25日(金)～3月14日(木)

欧州、アジア、中近東など世界各地を見聞した本郷新の足跡をたどりつつ、スケッチや彫刻、紀行文を紹介する。

■POST 3.11 in SAPPORO～沈みゆく記憶の淵で～

3月21日(木)～3月31日(日)まで

2011年3月11日に起きた東日本大震災後、美術家としてなすべきこと、なしうることを問う現代美術展。安藤栄作、石塚雅子、白濱雅也、半谷学、横湯久美らが出品。

記念館

■コレクション展

本郷新、その生涯と作品

(通年)2019年3月31日(日)まで

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>